

研究テーマ 自己教育力を育む教育～継続「ひとりで学ぶ」授業づくり～

アドバイザー 岡山大学教師教育開発センター 高旗 浩志 教授

平成 29 年度 河北中学校第 1 回授業研究会

期日 平成 29 年 7 月 7 日 (金)

### 1. 公開授業 (10:40～12:10) 3・4 限 全クラス

小集団活動を行う意図を明確にしておかなければならない。意図のない小集団活動は百害あって一理なし。授業内容とねらいに応じた授業形態を仕組むことが大切というアドバイスを頂いた。簡単な情報交換や確認であればペアで十分であり、小集団にする必要はない。3～4人で多様な意見を交流するような活動で小集団活動を展開すべきという助言は、小集団活動を展開する上で参考となる。

多くの教室で和やかに授業が進んでいるが、生徒が「分かったフリ」をしているのではないかという指摘をいただいた。これは教室に「防衛的風土」がある証拠である。大切なのは生徒同士が「分からない」を言える雰囲気であり、お互いに助け合い、高め合う「支持的風土」を作っていく必要がある。

### 2. 研究授業 (13:30～14:20) 3 年理科

#### 【授業参観の視点】

- ① 追究したくなる課題設定であったか
- ② 序盤に「自分の考え」をもつ時間があつたか
- ③ 小集団活動は意図のあるものであつたか
- ④ 「個の自力解決」の時間が確保されていたか

#### 【研究授業について】

滑車を使って「仕事の原理」を理解する授業であった。導入で演示実験を行い、どのような滑車を使えば、重いおもりを引き上げることができるかを示し、生徒の興味関心を引きつけていた。実験も 3 つの滑車を使って比較検討するもので、4 人グループが協力しなければ実現し得ないように設定されていて、小集団活動が意図的に仕組まれていた。導入から展開、まとめに至るまで、プレゼンテーションソフトを使って、学習の流れが示されていた。また実験においても手順書が細かく丁寧に作成されており、生徒が授業展開に迷うことがなかった。惜しまれたのは、3 つの実験を行ったことで、実験に時間を取られ、最後の「個の自力解決」の時間が足りなかったことと、生徒自身が文章で書くべきまとめを教員から手本を示しすぎて、生徒の思考・表現の時間が足りなかったことであった。

しかし「河北中めざす授業の姿」に沿った授業展開が実践され、河北中のめざす授業展開がよくわかる研究授業であった。

### 3. 授業研究会 (14:50～16:45) 全教職員

〈授業改善に活かしていきたいこと〉～協議より～

- ・プレゼンテーションソフトを活用した授業の流れの提示。
- ・専門用語の意味理解。「仕事」「力」「移動距離」を混同する生徒があり、他教科でもこの混同は起こりえる。事前に丁寧に解説が必要。
- ・生徒が夢中で追究したくなる課題設定とは、彼らの実生活に基づくものである必要性。
- ・キーワードを示して、自力解決を促すこと。自分なりに説明する力を育てたい。
- ・「この授業で何を身につけさせたいか」「何が分かるようになってほしいか」が明確だった。
- ・過度な配慮や準備ではなく「程よい不親切」を意識することは昨年から言われているが、やはり難しい。必要なものと、必要でないものの線をどこで引くのか考えさせられた。

〈アドバイザーの指導助言および講義〉 岡山大学 高旗浩志教授

### ①研究授業について

〈指導案〉小学校で何を学んできたのか、中学校1・2年ではどうかという既習事項が押さえてあり、学習指導要領の記述に沿って、授業のねらいが押さえてある。指導観においてもこれまでの授業の課題が明記してあり、今回の授業が何を狙っているのかが明確だった。ただ、生徒観については、具体的なエピソードをもとに、この集団のよい点と課題を具体的に記述しておく必要がある、これを詳述することで指導観がさらに生きてくる。

〈課題設定〉「300gのおもりを1m移動させるために必要な『力』『距離』『仕事』を出し、3つの実験で比較しよう。」というような具体的な課題設定であれば、生徒は実験結果をまとめやすかったのではないかと。生徒の興味関心を引く言葉を使うことが大切。

〈ワークシート〉記述式にするのはよい。生徒の思考を表現させるものであること。穴埋め式は単なる知識の転記作業であり、意味がない。

〈教科書〉教科書の記述に戻らせる活用を日常的に行うこと。教科書はよくできている。読み尽くすように指導してほしい。

### ②講義「わかったフリ」をさせない授業づくりを

河北中は授業スタイルの研究が進んでいる。今後必要になるのは、研究組織の確立と学級集団作りだ。学習する集団づくりを進めるには、各教科の授業作りと並行して教室に「支持的風土」を確立する必要がある。教員は「この問題分かる人！」ではなく、生徒が分からないことが聞ける、言える教室の雰囲気を作ること。「縛る学習規律」ではなく、「解放する学習規律」を。そのためには、分からないことが言い合えて、お互いにそのことを放っておかない、助け合い、高め合う集団作りが必要だ。

また、実効性が薄にも関わらず、盛んに行われている授業中の「儀式的な方法」を見直すこと。例えば、ホワイトボードに班員の意見を記入して全体で発表するという儀式。これは、話し合いで出た意見を捨てさせる活動となっている。さらには、少数の子しか当たらない発表スタイルで進む授業。学習とは「言われたことをするものだ」と子どもは学んできている。「学ぶ」とは、「分からない」と言えるところから始まる。安心して「分からない」と言える人間関係が必要。そして「どのように分からないのか」を中途半端にこそ表現させる。思考・判断・表現とは完成形を披露させることではない。生煮えの言葉を紡いでいく授業展開こそが、生徒を主体的・対話的にし、学びを深める。